



信州大学理学部同窓会報

会報 33 号

信州大学理学部同窓会
発行日 2019(平成 31)年 3月 1日
発行責任者 森 淳
松本市旭 3-1-1 信州大学理学部内
e-mail : rigakudou@shinshu-u.ac.jp

大学教育のこれまでとこれから—ご挨拶に代えて

理学部長 市野 隆雄

卒業生、修了生のみなさん、ご卒業、ご修了おめでとうございます。ご家族の皆様方にも、心よりお祝い申し上げます。松本キャンパスでの学生生活ではさまざまな人と出会い、多くの経験をされたことと思います。松本での出会いや経験がみなさんのベースとなり、今後の発展につながることを願っています。

新入生のみなさん、ご入学おめでとうございます。ようこそ多様性のるつば、信州大学理学部へ。本学部は、出身地だけをとってみても、北は北海道から南は沖縄まで、いろいろな地域から学生たちが集まっています(教員もそうです)。一方、長野県出身者は20%ほどですが、多士済々、それぞれユニークで個性的な人たちです。ぜひこれからの数年間、多様な人たちとの出会いを楽しんでください。

40年前の大学教育

さて、私が大学生だった40年ほど前は、大学はレジャーランドとも呼ばれていました。学生たちの中には、サークル・部活動や各種「遊び」に忙しい人も多く、授業外の活動こそが自分にとって大学へ入った意味であるとうそぶく人もいました。授業は、夏休みや冬休みの前後に休講が入ることもままあり、授業開始時刻に遅れてくる教員もいました。特に1~2年生の教養教育は、概して成績評価が厳しくなかったため、授業にほとんど出ず、友人にノートを借りて試験を乗り切る人も(科目によっては)いたように思います。熱意のある学生は、自主ゼミを立ち上げて自分たちで勉強するというスタイルでした。一方、大学院は、定員も少なく往々にして難関であったため、勉学に意欲

のある院生を前提とした、(分野にもよりますが)どちらかというと院生の自主性に任せた教育がおこなわれていました。良くも悪くも「自由放任」的な時代でした。

大学教育のいま

ひるがえって、今の大学はどうでしょう。授業は決まった回数が行われますし、毎回の授業内容もシラバスにちゃんと書かれています。授業は時間通りに始まります。ノートを借りて勉強するだけで単位を取れる科目は、ありません。学生は、部活やバイトに打ち込んでも、授業にはちゃんと出ないと卒業できなくなっています。今の日本の大学は、かつての「レジャーランド」から「学びを得る場所」へ確実に変わりつつあります。

大学教育のこれから?

旧聞に属する話になり恐縮ですが、私は米国東海岸の大学に在外研究員として1年ほど滞在したことがあります。もう25年も前のことです。そのとき聴講させてもらったいくつかの授業は、日本と・・・まったく違いました。どこが違ったか。一言でいえば、授業に向ける教員の熱意(もしくはエフォート)です。それとともに学生の授業への真剣さも違いました。

授業の方法は・・・いろいろです。「サンデル教授のハーバード白熱授業」のように議論を促す授業もあれば、基本的に教員がしゃべるスタイルの授業もありました。しかし、どの授業も、「真の学びを得る場所」の雰囲気満ちていました。

祝 松本高等学校開校 100 周年・信州大学創立 70 周年

6月1日(開学記念日)に松本市民芸術館にて開催(4ページをご覧ください)

同日 11:00 より理学部同窓会総会を開催します

松本市勤労者福祉センターにて(7ページをご覧ください)

米国の2学期制の典型的なカリキュラムでは、学部生は半年に3つくらいしか授業を取りません（今でもそうです）。私が滞在した私立大学では、1つの授業は、教員1人による大講義（週2回程度）と、TA（ティーチングアシスタント）によるセクション（少人数クラスに分かれての補習、週3回程度）から成っています。セクションは、講義内容についての質問やディスカッション、試験に向けた問題演習や、理系の場合は実験や実習が含まれます。学生は毎週、教科書や課題論文を数十ページずつ読みこなしていかなければ授業についていきません。

日本の大学の授業しか知らなかった私にとっては、すべてが不思議でした。まず、学生たちは、なぜこんなに真剣に授業に取り組むのか。それは一つには、大学での成績が進学や就職の成否に重要な意味をもつからのものでした。しかし、より重要なのは、「この分野の核心部分を自分のものにするぞ」という明確な目標を学生が持つよう、教員が授業をうまくデザインし、課題を設定しているからであるようにみえました。

では、教員たちはなぜ熱意を持って授業に取り組むのか。それは、「真剣な学生たち」によって授業を評価されることが要因の一つのものでした。紋切り型の知識を伝達するだけでなく学生の興味を引きつける授業をすること、また、学生がじっくり読んだり考えたりしたプロセスが反映されるようなテスト問題や課題が出されること、が学生から求められていました。私が驚いたのは、世界的に有名な教授たちが、このような授業を構築・維持するために、多くのエフォートを投入していた点です。

もちろん、この米国の授業システムは、（成績や評価による）競争原理を全面的に導入しているからこそ可能になっている、という問題を見逃すわけにはいきません。しかし、競争にさらされるのが主に思春期やそれ以前の子ども時代である日本とは異なり、米国の場合、競争原理の導入がどちらかというとうち入学以降となっており、したがって、その競争に乗るかどうかを、（大人としての）個々人の意思によって決めることができる点が救いかもしれません。

これからの日本の大学教育が、全体としてどのようなものになるかはわかりません。日本の、早期に専門分化して小規模科目で学ばせる教育システムに、単純に上記の米国流のやり方をそのまま適用するのは限界があるでしょう。ただ、いずれにしても、われわれ理学部教員は、目の前にいる「真剣な学生たち」が伸びていけるような教育をおこなう必要があると考えています。

いつかどこかで聞いた言葉に「教育とは、坂道で重いリヤカーを引いている人を、気づかれぬように後

ろから押してあげる」というのがあります。見守って、支援するが、本人は自分の力でやったと感じている。「見守りの教育」とでもいえるでしょうか。これは、厳しく教える中で残っていく人のみを認める教育、自由放任にして独力でやれる人のみが残っていく教育とは少し違います。学生の中にはいろいろな個性があることを前提にした「見守りの教育」か、それとも、すべては学生の資質と忍耐力しだいであるという「切り捨ての教育」か、今、大学教育は曲がり角にきているのかもしれませんが。

閑話休題。ここで、理学部の取り組みについて、最近の様子を一部ご紹介します。

- ・学生との個人面談を年2回おこなっています。各学科コースで担任教員が、学生一人一人と face to face で修学指導などをおこなう取り組みです。
- ・「理学部学生相談室」を2018年度から設置し、健康安全センターのカウンセラーの方に月1回来ていただいています。悩みのある学生さんは、ぜひ気軽に学務係に問い合わせてください。2019年度は、週に1回となります。
- ・放課後、授業などに関する質問に応じる「サイエンスラウンジ（数・物・化）」も10年越しで続いています。先輩学生・院生のアドバイスを求めて、毎年約600人以上の学生が利用しています。
- ・冬は寒くて利用できなかったC棟1階のラウンジスペースですが、ガラスで仕切られ、冬でも自習スペースとして利用できるようになります。
- ・2017年度の学部生の休学率、退学率は、それぞれ1.5%、2.9%で、前年比0.7ポイント、0.2ポイントの減となりました。
- ・学部の改組後4年が経ちました。学生が3つの教育プログラムから選べるようにした点が改組の目玉の一つですが、今回の卒業生は、先進：1割、標準：7割、学際：2割程度でした。
- ・新規採用された若手教員に対して、経験豊富なメンター教員やアドバイザー教員がそれぞれ配置され、教育や研究についてスーパーバイズしています（着任後4～5年間）。アドバイザー教員は、若手教員の授業を年2回参観し、評価・助言をおこなっています。
- ・若手の研究をエンカレッジするため、①学部3年生（先進プログラム履修者のうち希望者）への研究費支援、②院（修士）1年生への学会発表の旅費支援、③院（修士）2年生などへの学振特別研究員への申請支援、④院（博士）学生への国際学会発表の旅費支援、⑤（若手）教員への論文投稿費支援、などをおこなっています。

・その他、学生や教員の国際交流、自然科学館、JST事業「新世代・自然共生科学フォーラム」などの取り組みも着実に進展しています。

さて、本年は信州大学創立70周年・旧制松本高等学校100周年の記念すべき年です。6月1日には、まつもと市民芸術館で記念式典がおこなわれます。信州大学長期ビジョン2030や学校歌のお披露目などもお

こなわれる予定です。また、理学部の学生による企画ブース展示等も予定しています。この機会にぜひご列席いただければと思います。

最後になりましたが、同窓会会員のみなさま方には、常日頃から理学部の維持発展にご協力いただき、ありがとうございます。今後ともいっそうのご支援、ご指導をよろしくお願いいたします。

学 長 挨 拶

濱田 州博

日頃より信州大学理学部同窓会の皆様には、ひとかたならぬご支援、ご協力を賜りまして誠にありがとうございます。まずは厚くお礼を申し上げます。本年もよろしく願い申し上げます。

本年ですが、和暦では平成31年、西暦では2019年です。ただ、皆様ご存知のように、平成は今年4月までで、5月からは新しい元号になることが決まっています。新年号は少なくとも「M」「T」「S」「H」が頭文字のものにはならないことが、ほぼ確定していると言われてはいますが、どうなるでしょうか。また、皇太子さまが即位する2019年5月1日と、即位を国内外に公式に示す「即位礼正殿の儀」を開く同年10月22日を祝日扱いとする法律が成立しております。これらの日は、1回限りの祝日扱いとなり、2020年以降は祝日とはなりません。5月1日が祝日となると、祝日法で「前日および翌日が『国民の祝日』である日は休日とする」と定められているため、前後の4月30日と5月2日も休みとなります。4月27日土曜日から5月6日月曜日の振替休日まで10連休となる人も多いかと思えます。仕事の関係にもよりますが、今から過ごし方を考えておいた方が良さそうです。

即位礼正殿の儀が10月22日に開催されると上述しましたが、その折に天皇陛下（現皇太子殿下）がお召しになる服装をご存知でしょうか。黄櫨染御袍（こうろぜんのごほう）をお召しになると思われます。黄櫨染を大辞泉で調べると「染め色の名。黄色みがかかった茶色。黄櫨（はぜ）の樹皮と蘇芳（すおう）の心材の煎汁（せんじゅう）に、灰汁（あく）・酢などを混ぜて染めたもの。嵯峨天皇以来、天皇の袍（ほう）に用いられる。」と書かれています。独特の染色であり、繊維染色化学を専門とする私にとっては、非常に興味を引かれる装束です。

さて、本年、信州大学は、昭和24年（1949年）に新制大学として設立されてから70周年の節目を迎えます。設立時の前身校は、松本医科大学、旧制松本高等学校、長野師範学校、長野青年師範学校、長野工業

専門学校、上田繊維専門学校、長野県立農林専門学校で、それぞれに歴史を有しております。それら前身校のうち、旧制松本高等学校は、松本市の20年にわたる誘致活動の末、大正8年（1919年）に誕生しています。旧制松本高等学校の誕生から数えるとちょうど100年目の記念すべき年となります。理学部は、昭和41年（1966年）に設置されておりますが、歴史を遡っていくと、昭和24年（1949年）の信州大学発足時に設立された文理学部、さらに、旧制松本高等学校に行き着きます。ぜひ理学部同窓会の皆様には、前身校も含めた100年の歴史を振り返る機会としていただければと思っております。

開学記念日の6月1日土曜日には、記念式典、記念コンサート、市民公開講座をまつもと市民芸術館において、記念祝賀会をホテルブエナビスタにおいて開催する予定です。特に、記念コンサートでは、信州大学の大学歌をお披露目する予定で、今から楽しみにしているところです。多くの皆様にご出席いただきたいと思いますので、よろしく願い申し上げます。また、周年記念事業の成功に向けて、是非皆様からのご寄附をお願い申し上げます。信州大学創立70周年、旧制松本高等学校100周年記念事業の詳細に関しては、ウェブページをご覧ください。

(<https://www.shinshu-u.ac.jp/univ70th/>)

少し理学部の現状について触れておきます。平成27年4月に数理・自然情報科学科、物理科学科、化学科、地質科学科、生物科学科、物質循環学科の6学科から数学科と理学科の2学科に改組しておりますので、平成31年3月に改組後最初の卒業生が出ることとなります。数学科には、数理科学と自然情報学の2コースが、理学科には、物理学、化学、地球学、生物学、物質循環学の5コースがあり、それぞれのコースで学んだことを今後活かしていただければと期待しております。また、平成30年4月に、医学系研究科と総合工学系研究科を「医学系専攻」、「総合理工学専攻」、「生命医工学専攻」の3専攻に統合再編した「総合医